

研究ノート

ジュネーヴから日本の友へ

——史料探索の哀歎——

永 治 日 出 雄

第一伸 『エミール』の草稿を追って

ジュネーヴで泊っている旅館は、ヴォルテールの屋敷を改築したもので、風化した石壁を蔦の枝葉が覆い、室内も薄暗く陰気です。しかし、物価高で有名なジュネーヴで、このホテルは格別に料金が安いので、すこし長く滞在する旅行者には向いています。

シャトレ侯爵夫人の肖像を掛けた食堂で、簡素な朝食をすませると、ルソー学会の事務局長であるヴィルツ氏から電話が入りました。『エミール』の『ファール草稿』を調べたいとのことですね。よろしい。御覧になれるよう配慮しましょう「あらかじめ手紙に要件を書いたので、口頭で説明する面倒を免れます。ヴィルツ氏と会う日時を決めました。「しかし、『ファール草稿』は、まったく骨の折れる史料ですよ。」温厚なヴィルツ氏が、笑いながら付け加える声が伝わってきました。

ふたたびヨーロッパに滞在する機会を得た私は、書誌学や古文書の勉強を、当初の計画に含めました。こうした学問への関心は、

勤務する大学の紀要に『エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの哲学・教育論争について』を連載する過程で芽生えたものです。とくにルソー著『エミール』とエルヴェシウス著『精神論』の関連を論証したマッソンの先行研究は、史料批判の厳しさと面白さに眼を開かせたのです。ルソーやエルヴェシウスの著作や手稿をめぐっては、多くの書誌学的な問題が潜んでいます。

正直のところ私は、手稿や古文書の検討に、まだ本格的に取り組んでいません。公刊された著書や定期刊行物のほとんどは、パリの国立図書館やロンドンの大英博物館において、容易に探索し、借り出せます。しかし、手書きの手稿となると、どんな史料がどこに所蔵され、どのような手続で閲覧できるかすら判りません。稿本目録が不備で、利用の条件も厳重な場合が多く、明確な目的や強烈的な情熱がないと、手稿や古文書の検討は敬遠したくなります。

『エミール』には五つの草稿があることを御存知でしょうか。第一は決定稿とされる『ジュネーヴ図書館草稿』、第二はルソー夫人テレーズがフランス国民公会に寄贈した『ブルボン草稿』、第三は最初の下書きとみられる『ファール草稿』、第四はルソーから友人ムルトゥに預けられた『サヴォワ人助任司祭の信仰告白草稿複本』、第五はヌーシャテル図書館に蔵される『エミール断片』です。

なかでも第三の『ファール草稿』は、『エミール』の原型や執筆の過程を把握するうえで、必須の資料と言えましょう。この草稿を百年ちかく保存してきたジュネーヴのファール家は、一九二一年の『ルソー学会年報』にその概要を発表しました。『ファール草稿』はまもなくルソー学会に寄贈され、数多くの文献や遺品とともに、ジュネーヴ大学・公共図書館に収蔵されています。

これらの手稿を駆使しつつ、ジマックは『エミール』の第一編から第三編までについて、マッソンは第四編に含まれる『信仰告白』について、膨大な研究を世に送りました。ガリマール社から刊行中の『ルソー全集』は、ジュネーヴの研究グループを主体として編まれ、学問的な水準の高い版本です。この全集の第四巻では、ブルジュラン解説ヴィルツ校閲『エミール』が六三〇頁を占め、さらにスピンク・ウィルツ編『ファーヴル草稿』が、一八四頁にわたり抜粋されています。

こうした配慮は大変に有難いのですが、『ファーヴル草稿』の抜粋だけで、決定稿との異同を総合的に考察することは困難です。とくに第四編と第五編に相当する下書きは、僅かな分量しか活字にされていません。しかし、青年エミールに授けられる道徳教育や政治教育こそ、ルソーの思想の卓越性を示す個所であり、執筆の過程にまで遡って究明したいと私は考えます。

カルヴィンの宗教改革記念碑の建てられたバステイオンは、大変に美しい公園で、ジュネーヴ大学・公共図書館もそこにあります。一階にはルソー史料館と稿本室が付設され、『エミール』の著者の遺品や文献が、世界でもっとも多く所蔵されています。ルソー学会の会員として私も図書館と史料館への永久入館証を持っており、稿本室へも簡単に通してくれました。

ただし、手稿を閲覧するためには、前日に予約する必要があるようです。最初に借り出したのは『ジュネーヴ図書館草稿』です。監視の届く座席を館員に指示され、二冊本の頁を繰りました。この文献にもルソーが若干の削除や修正を施した箇所がありますが、私の研究目的に決定稿はほとんど用をなしません。『エミール』の成立過程

を把握するには、未完成の下書きこそ役に立つのです。つぎに『ファーヴル草稿』の閲覧を申し込んだ私は、特別の史料なので、ルソー学会の許可があれば、と係官に言われました。

その週はすこしジュネーヴを離れるので、私はルソー学会のヴィルツ氏に手紙を書きました。十日ほど後にぜひお会いして、閲覧許可を頂きたい、と申し入れたのです。幸運にもヴィルツ氏とは面識がありました。一九七八年のルソー・ヴォルテール記念行事に参加した際に、パリとジュネーヴで会っています。ヴィルツ氏の手紙はいつも精密な字体で書かれ、ルソー学会やヴォルテール研究所の活動を詳しく知らせてくれます。京都の上賀茂は私の好きな神社で、葵祭を画いた絵馬は名作だと感じます。その絵馬を年賀状がわりに贈ると、平素は学問しか語らないヴォルツ氏も非常に喜んでくれました。お返しに私のところへ、絶版とされるジュネーヴ旧市街のアルバムが届いたので。

書誌学的なルソー研究で知られるヴィルツ氏は、ヴォルテール史料館・研究所の所長を兼務しています。この施設は啓蒙思想の権威ベスターマンによって創立され、私の宿から至近の距離にあります。ヴォルテールが暮らした城館デリスが、瀟洒な白亜の研究所に変わっています。職員は所長と執事と秘書の三人だけで、来訪者も稀しく、いつも深閑とした館内です。

史料室にはヴォルテールと啓蒙運動に関する文献が充ち溢れています。ここで編纂された一三二巻のヴォルテール全集、なかでも約一万通の書簡は、十八世紀の社会と文化を解き明かす宝庫です。多数の書簡が城館デリスに収蔵され、一枚ずつ透明ファイルに保存されています。原本のない書簡も、可能なかぎり複写が各地から取り

寄せてありました。

ヴォルテールが『カンディード』を執筆した書齋が、現在は所長室になっています。客として通された私が、「閲覧許可を」と切りだすと、微笑したヴィルツ氏は広い事務机の上を指さします。半紙を重ねるように、沢山の古びた紙が積んでありました。この書誌学者はいまも『ファーヴル草稿』を手元に置いて、研究所や学会の職務のかたわら検討を進めている、と私は気付きました。『草稿』は相当の分量で、一度には持ってません。多くの頁においてルソーは、純長の右半分にあらず下書きを几帳面に書き、ついで右半分の空白に補足と修正を記しています。書き直しや斜線の多いのは当然ですが、字体そのものがなんと細かなことでしょう。

ルソーがエルヴェシウスの著作を論評し、『エミール』の決定稿では削除された箇所を、試みに探してみます。破れ易い『草稿』をめくりながら、手慣れたヴィルツ氏もかなりの時間を費やして、やっとその箇所をみつ付けてくれました。「複写をしても」と言う所長の言葉を聞くまでもなく、私の心は絶望感に包まれていきます。

ルソーの微細な文字は、複写すればますます判読し難いでしょう。しかも『ファーヴル草稿』と『エミール』の決定稿を対比するためには、全体的な検討が大切であり、若干の頁だけを判読しても仕方ありません。複写を依頼する勇氣をついに奮い起すことができず、エルヴェシウス批判の箇所と『草稿』全体の様子を確認するだけに終りました。

こうして古文書の研究に立ち塞がる大きな障害をはじめて算り、みずからの無謀と軽率を恥じたのです。とりわけ異国の研究者によって、最大の困難は史料の閲覧や文章の判読より以前に存在すると

感じます。『ファーヴル草稿』の検討について言えば、少くとも一年間はジュネーヴでその仕事に専念し、すべての箇所を筆写する覚悟が必要でしょう。ヨーロッパの多くの史料館には、古文書の専門家がつねにいて、崩し字や署名の読みかただけでなく、筆跡の鑑定や執筆の時期に関しても、質問すれば親切に手掛りを与えてくれるのです。

しかし、ほかの研究者がすでに取り組んでいる場合、彼らの諒解や協力を得て、同じ史料を検討することは、容易な業ではないと感じます。そうした障害を打ち破るだけの強固な意志と周到な計画と生活の準備が私にあるでしょうか。

現在の大学に赴任してから十二年目に、私は一年間の在外研究を許され、その大半をパリで、若干の月日をジュネーヴで過しています。そして、これほどながく外国で生活する機会には、いまの勤務条件が続くかぎり、定年退職まで二度と訪れないでしょう。ヨーロッパで果したい事柄はあまりにも多く、ソルボンヌへも聴講に通い、エルヴェシウスやデイドロに関する得難い史料も集めつつあります。しかも、私たちが異国で真に学ぶべきは、大学や図書館においてではなく、むしろ体験という厳しい教師、世間という大きな書物からと信ずるのです。

あなたがたの御努力によって、数年前に日本教育史研究会が結成されたとき、私のような者にまで御勧誘を頂いたことを光栄に思っています。この分野における何人かのすぐれた研究者を、敬愛する同僚や友人として存じ上げ、私自身にも日本の教育について学ぶ関心や必要がないわけではありません。とりわけ学生に講義する場合、いきなりモンテーニュとか啓蒙運動と言っても反応がないの

で、内村鑑三や学徒出陣について語るほうが多いのです。お送り頂いている機関誌と会報から啓発されることもしばしばで、若手・中堅研究者の学問的情熱や第一線の論究の緻密さにとりわけ感服します。しかし、専門的にはフランスの近代思想だけに取組んできた私が、日本教育史の研究に関してなら学術的に貢献できぬ現状を申訳なく思い、入会したのが安易であったかとも反省しています。

外国を研究する人は日本についてさらに学び、日本を専門とする人は外国についてさらに学ぶことが望ましい、と自戒を籠めて以前に私は書きました。日本におけるルソーの受容過程や、デイドロとヴォルテールの日本観を検討するのも興味深い課題です。しかし、外国研究者と日本研究者の接点をその種の問題だけに限定すると、交流する意義も啓発しあう事柄もかなり狭くなるでしょう。異なる領域の研究者に事実の説明と理論の開陳を仰ぐことも大切ですが、学問の方法や仕事の裏話を聴くことこそ、自己の視野を拡げ、研究の停滞を打開する契機となります。異国で摸索と挫折を重ねつつある私は、書誌学の基礎的知識と、古文書を調べる心構えや秘訣について、日本教育史や日本史や国文学から学んでおくべきであったと後悔しています。

ヨーロッパで外国研究者よりもむしろ日本研究者が、根源的な事柄に関心を寄せる場合も多いと信じます。『エミール』の決定稿や『カンディード』の著者の肖像も、ジュネーヴを訪れる日本研究者の眼を惹くかもしれません。しかし、そもそもルソー史料館やヴォルテール研究所は、いかなる資金で設立され、どのような計画のもとに運営されているのでしょうか。こうした基本的な問題こそ、史料の保存に腐心し、学術体制の貧困を嘆く研究者にとって、第一に

尋ねたい事柄と思われます。

『ファーヴル草稿』への執念を完全に捨てたわけではありませんが、さすがに意気阻喪してウィルツ氏に別れを告げます。ただしヴォルテールの書簡のなかには、エルヴェンヌスの一家と交わされた手紙が若干あり、それらは研究所で手稿から複写して頂きました。

城館デリスの庭園では、散歩の途上らしい老人が早春の花木を眺め、玄関とは反対の方向に見覚えのある屋根が覗いています。小道を辿ると、すぐに旅館の裏庭に出ました。来るときは遠回りしたようです。町名は違いますが、研究所とホテルは背中合せで、かつてはひとつの屋敷を構成したと悟ります。精神界の王者の旧居がジュネーブ市内にふたつ存在するのではなく、私の泊る陰気な宿屋は、城館デリスの召使や下男が住んだ別棟にちがいません。

この古びた建物で、いつそう気の重くなる経験をしました。食堂とは言えないほど簡素な広間で朝食をとっていると、すこし離れた場所で十歳ぐらいの子どもの口に、母親が食べものを運びます。うす暗い室内ですが、その男の子が、日本でも裁判訴訟になった薬害の犠牲者であろうと気付きました。しかし、私の胸を締めつけたのは、むしろ母親の様子です。これほど暗鬱で絶望的な表情を見たことがありません。数日前の新聞は『孤独な散歩者の夢想』に描かれた美しいビエンヌ湖にも、汚染が拡がりつつあると報じました。人間による自然の破壊をルソーは忌憚なく告発し、社会的弱者に対する不当な裁判に、ヴォルテールは敢然と抗議しました。そうしたルソーやヴォルテールの再来が、現代のヨーロッパにも必要と申せましょう。

以上ながながと駄弁を連ねたことをお詫びし、一層の御自愛と御

活躍をお祈り致します。研究会の皆様にもなにとぞよろしくお伝えください。

第二伸 サヴォワの溪谷で

はやくから父母と別れ、流浪の歳月を重ねるジャンシロジャックルソーが、二四歳で本格的な自己教育に着手したのは、サヴォワ公国の古都シャンベリーにおいてでした。愛情の念を籠めて『告白』で回想したとおり、彼の生涯でもっとも幸福な日々をそこで過します。シャンベリーから二キロに離れたレシシャルメットに、鄙びた隠れ家を借り、優雅なワランス夫人とふたりだけで暮らすのです。アヌシーの湖畔ではじめて出逢ったときからつねに愛慕した婦人と溪谷を散歩し、詩文を朗読する幸せが訪れました。煩らわしい労務からも、複雑な人間関係からも解放されて、ルソーは草花を育くみ、星屑を眺め、書物に没頭します。

一七三六年の夏に始まる自己教育で、彼はデカルトやライブニッツやマールブランシュの著作を繙き、ポールロワイヤルの『論理学』とロックの『人間悟性論』から多くを学びました。その前年すでにルソーは、刊行もないヴォルテール著『哲学書簡』を読み、学問への関心が芽生えたのです。こうした勉学において彼は、特定の作品に集中的に取り組むとともに、ラテン語や幾何学や天文学や植物学へと、巧みに学習の時間を配分しています。ルソーがパリに出て、デイドロなど哲学者たちと交わり、『学問芸術論』で文壇に登場するまでには、さらに十三年の歳月が流れます。けれども、粗野で孤独な若者が、偉大な思想家に成長する素地は、レシシャルメットの隠れ家で形成されました。

しかしながら、自己教育の直接の契機は、ルソーの病気が悪化したことにあります。極度の発作と心臓の衰弱に生命の危険を感じたルソーは、残された最期の日々を真に生きようと決意します。こうして二十代なかばまで無学で放縦であった若者が、僅かな余命と覚悟しつつ、勉学と練磨に専念するのです。

シャンベリーは十三世紀から二百年にわたり、サヴォワ公国の首都でした。ここで最盛期を築いたグメズ三世はスイスとイタリアにまで勢力を拡げるとともに、十字軍に参加して、トルコとも激しく戦いました。しかし、山峽の小国サヴォワリはフランスやスペインなど列強の足下にはしばしば蹂躪され、やがて首都もトリノに移り、十九世紀の中葉に滅亡しました。

現在のシャンベリーはフランス共和国サヴォワ県に属し、人口十三万の県庁所在地です。この地方はフランスの東南端にあり、パリからの国鉄ではリヨンを経由して約六時間を要します。しかし、ジュネーヴの玄関にあたるコルナヴァン駅で、マルセユ方面への列車に乗れば、一時間半でシャンベリーに着くのです。国境を超えるので、乗車前にパスポートを提示しますが、係官が手にとつて調べることがほとんどありません。ジュネーヴへは近隣のフランス領から通勤する労働者も珍らしくないのです。ただし両国の間には一時間の時差があり、時計を調整しないと、大変な失敗を演ずるものになります。

朝早くジュネーヴから乗った列車は、レマン湖の南をくだり、モンブラン山塊の裾野を走って、フランスに入ります。アルプスの峻嶺に囲まれ、清澄な湖を秘めたサヴォワは、割合に平坦なフランスの国土のなかで、珍らしく起伏に富み、風光に恵まれています。

シャンペリーへの旅の途中で、この地方に関する冊子を手にした私は、厳しく麗しい風土が剛健で質朴な民族を育くんだのを知りました。サヴォワと聞けば、『エミール』に登場する貧しい助任司祭と、彼が語る長大な『信仰告白』を思い出すでしょう。そこには誠実な僧侶の深い人類愛が、墮落した若者を立ち直らせる様子が描かれています。こうした理想的人間像を創造するにあたって、なぜ故郷として山国サヴォワを選んだかが、ようやく私にも推察できま

す。
シャンペリーの郊外にあるレリシャルメットへは、国鉄の駅からタクシードで行くほかありません。サヴォワの博物館や城砦のわきを通って、市街からすこし遠ざかると、人家も疎らとなり、鬱蒼たる山映に入ります。やがて小道と樹林に沿って清流が輝やき、陽当りのよい斜面に切妻屋根の二棟が見えました。この溪谷の農家こそ、ルソーが静養した住いであり、市当局の配慮によって昔のままに家屋や庭園が保存されています。

レリシャルメットのルソー記念館は、観光案内にも記されていますが、出逢ったのは一組の訪問者だけでした。田舎風の部屋にはルソーおよびワラン夫人の肖像や家具や楽器が置かれ、シャンペリーで書かれた手紙や文書も陳列されています。史料を眺めていくうちに、小説家のジュールジュニサンド、詩人のフランシス・ジャム、旅行家のアーサー・ヤングなどがレリシャルメットを尋ねたことを知りました。窓辺から庭園に出ると、水仙やエニシダやあんずが咲き乱れ、遙か彼方にモンブリランの雪嶺が霞みます。

バルザックやモーツァルトの旧居と同様に、ルソー記念館にも書籍や草稿はあまり蔵されていません。文献を研究するためには、図

書館か古文書館に赴いたほうがよいのです。しかし、レリシャルメットの木蔭にたたずんだ私は、ルソーに関する史跡が、揃って山紫水明の土地にある事実に関心しました。生家の保存されたジュネーヴ、『新エロイーズ』の舞台に選ばれたヴウエイ、『孤独なる散歩者の夢想』で知られるサン・ピエール島、終焉の地となったエルムンヴイル。ヨーロッパに旅した最大の成果は、『エミール』の著者が愛惜した生活環境を確認できたこととさえ申せましょう。

帰りぎわにルソー記念館の周囲を散歩すると、林のなかに納屋や牧場があり、すこし離れたところに洒落れたレストランを見付けました。眺めのよい露台はかなり混んでいて、ほとんどの客はシャンペリーの市街から車で来たようです。サヴォワ特産の岩魚料理と白ワインを楽しむうちに、朦朧とした気分になりました。酔がまわると、綿密に調べたり書いたりはできませんが、想念が大胆に飛翔していきます。

『告白』や『孤独な散歩者の夢想』のお蔭で、私たちはルソーの生涯や生活を詳しく知っています。こうした自伝的な作品は、そもそもどのような意図のもとに執筆されたのでしょうか。御承知のとおり『告白』の序文には、隠さずに自己を語るることによって、人間の真実を開示する、という決意が述べられています。また、カトリック教会から唯物論者にいたるまで、さまざまな立場の敵対者や批判者に包囲されて、みずからの正当性を訴える気持も強かったと思われまふ。けれども、幼時を回想する印象的な筆致や、ワラン夫人をめぐる甘美な想い出に注目し、自伝を綴った動機として、過ぎ去った幸福を再現する願望を指摘する研究者もいます。

そうした過去の再現は、現実を忠実に復元したものではありません。

ん。レリシナルメットでの生活を描いた叙述が、一定の潤色や純化を伴っていることは確かでしょう。それどころか、隠れ家での同棲自体が、ルソンの虚構にすぎない、と断定した論文すらあるのです。いずれにしてもルソーは、自伝を書くことによって過去を呼び起こし、観念の世界においていっそう純粋で理想的な青春を築くのです。

『告白』の著者が人生を反芻し、二重に生きたとするなら、彼の思想や生涯を追究する私自身は、なにに喩えられるでしょうか。近代日本の歴史や人物を、倦まず弛まず研究しておられるあなたからも、御自身の仕事と御自分の人生との関連について、お話を伺いたいと望んでおります。

社会の法則性を発見したり、継承すべき教育的価値を確証するところが、教育史に取組む意義としてしばしば主張されます。そのような発見や確証をとおして、私たちが人類の進歩に寄与する可能性を、否定するつもりはありません。しかし、国民各層の意識を変革するために、埋れた手稿を判読したり、哲学者の遍歴を追跡することが、はたして必要でしょうか。そのような調査と探求が数多く蓄積されて、やがて定説の修正や学問の革新に導くとしても、個々の学徒の労苦はあまりに多大であり、期待される成果はあまりに茫漠としています。パリの国立図書館でアンシャン・レジームに関する無尽蔵な史料に圧倒されたときも、ノルマンディの山村にエルヴェシウスの末裔を尋ねたあとも、研究の社会的効用や自己の能力の限界を考えると、深い虚無感と孤立感に襲れるのです。

けれども、『エミール』の一節に深い意味を見出した感銘、ルソ

外国における第一夜を、カルチエリタンの旅館で過ごした私は、かつてその地に集結した哲学者たちを、伝記的に研究することへと傾いていきました。ルソーについてもエルヴェシウスについても、思想を解明する仕事から生涯を追跡する試みへと、主要な関心が移ったのです。以前から手掛けているエルヴェシウスを中心に、ルソーやデイドロの生いたちと人間形成について、いまは詳しく調べつつあります。こうした探究に深入りするにつれて、彼ら哲学者たちとともに成長し、哲蒙の世紀に棹さすかのように、私自身が錯覚するのです。

歴史や伝記を学ぶことが、先人の生涯や過去の時代を生きる奇蹟を可能にする、と表現してもよいでしょう。しかし、ルソーとエルヴェシウスの人生行路を充分に復元するために、哲学者たちを主題とする書物だけでなく、十八世紀の家庭や学校や絶対王政やブルジョアジーに関する膨大な史料を検討することが必要です。そして、意志と計画が強固であり、仕事や生活のうえで幸運に恵まれた場合でも、当初の目標を達成する頃には、私の生涯も終点に近づいているでしょう。けれども、公害病患者を救済する自信もなく、情熱的な恋愛も貰けず、立派な建築を残す才能も持たない自分の人生に、なんらかの一貫性や集中性を織り込むとすれば、哲蒙思想と哲学者たちに関する研究による以外は困難です。過去への探究が、現代に生きる凡庸な人間を、辛うじて支えていると感じます。

自分と似通った性格や境遇の人物を考察することは面白くもあり、励みや慰めにもなります。しかし、遠い国の異なる時代において、驚くような生きかたをした人達を研究の対象に選んだことを、私は非常な幸運と思っています。哲学者たちの生涯を追跡する私

は、観念のなかで多情多感なルソーや莫大な財産をもつエルヴエシウスのように呼吸し、卓越した組織力に恵まれたデイドロや不幸な捨子であるダランベールや才色兼備の誉れ高いレスピナス嬢と知り合うのです。こうして人生の多様性や奥深さを教えられ、人類の築き上げる素晴らしい事業や創造に関与することこそ、歴史の研究者にとって最大の喜びと申せましょう。

慌しい日帰り旅行でしたが、日が長くなったので、シャンペベリーから五十キロほど離れたアヌシー湖へまわりました。ワランス夫人との出逢いの土地ですが、かなり観光化しており、眺めも意外に平凡です。半年前にローマからの夜行列車でふと目覚めると、山裾の湖畔に初雪が降っていました。その神秘的な雪景色をアヌシー湖とばかり思い込んでいた私は、おなじサヴォワに位置しても、ラマルチーナが称えたブルジュ湖であろうと悟りました。

レニシャルメットの史跡についてお伝えするつもりのところ、偶然とした幻想が拡がり、またしても長くなりました。

新緑の季節ますます御健勝のことと推察し、御研究の発展をお祈り致します。

（愛知教育大学 名古屋市昭和区五軒家町十八の五、ベルヘイツ二〇二）

教育資料の分類とコード化の試み

——山形県立博物館教育資料館の紹介を兼ねて——

尾形典典

一 はじめに

山形県立博物館教育資料館は、山形県立博物館の分館として昭和五五年一〇月一日開館した。この長い名称も、分館であるが故の命名である。

施設は、解体復元された重要文化財「旧山形師範学校本館」を利用している。というよりも、復元整備された文化財の有効利用のために教育資料館の構想が生まれたのである。

展示は「教育と県民」を基本テーマとし、これにもとづく七つのテーマから構成されている。

旧教室を展示室としていたため、一室一テーマで展開しており、テーマはそれぞれ○藩校と寺子屋、○学校のはじまり、○明治から大正へ、○昭和初期の教育、○戦時下の教育、○新しい教育、○教員養成のあゆみ、となっている。

これらのテーマにもとづき、県内全域から教育に係わるあらゆる資料を収集し、その一部を展示している。

展示物は、教科書やノート・簿冊などの、いわゆる文献資料だけではなく、なじみにくい教育をわかり易く語るために、それぞれの時代を象徴する学校模型や学習風景のジオラマ、コスチューム、VTRなどが適所に配置され、視覚による理解をも得られるような試みが種々なされている。

日本教育史研究

第 2 号 (1983. 5)

目 次

研 究

- イエズス会巡察師 A. ヴァリニャーノ
の教育計画について…………… 梶 村 光 郎…1
(論評 高祖敏明 嶋田鋭二)
- ワッパ騒動の教育要求——その自覚化の過程を
追って…………… 伊 藤 伸 也…30
(論評 日塔哲之 堀浩太郎)
- 「大正デモクラシー」と公民科の成立——文部省少壮
官僚の公民科論——…………… 斉 藤 利 彦…64
(論評 片上宗二 久保義三)

書 評

- 上野浩道著『芸術教育運動の研究』…………… 碓 井 岑 夫… 104
補足と感想…………… 上 野 浩 道… 108

ノートと紹介

- ジュネーブから日本の友へ——史料探索の哀歎——…………… 永 治 日出雄… 111
教育資料の分類とコード化の試み…………… 尾 形 興 典… 118
日本教育史の講義を通して考えること…………… 千 葉 昌 弘… 128
日本教育史の講義を受けて…………… 粟 井 健 一… 131
全国地方教育史研究会について…………… 笹 森 健… 135
『創刊号』論評についての感想と反論…………… 江森一郎 遠藤芳信… 136
自由往来『創刊号』に寄せて等 編集後記…………… 142
-

日本教育史研究会